函館の幕末・明治期の学校

中尾 仁彦 さん　箱館歴史散歩の会主宰、第1回 函館検定 上級試験合格、ＮＨＫラジオ「どどんと道南ラジオ」に月１回レギュラー出演中。

日本最初に鎖国の扉を開いた函館。各国の文化、宗教、風土が洪水のように流れる中、函館にはいくつかの特色ある学校が誕生します。

諸術調所

１８５６年に幕府は、函館に「諸術調所」と江戸に「蕃書調所」を設置します。「諸術調所」は、基坂の旧函館病院地にあり、五稜郭の設計で有名な武田斐三郎が実務を中心に教えました。対する「蕃書調所」は理論を中心に学びます。「諸術調所」設立の目的は、開港によってもたらされる西洋の知識や情報を収集、分析して蝦夷地の開拓に役立てること、そのための人材を育成することで、蘭学、測量、航海、築城、砲術、化学などを教えていました。身分制度が厳しく武士の師弟以外は公の学校で学べなかった時代に、「諸術調所」では身分に関係なく試験を行い入学させています。そのため、全国から優秀な人材が集まります。地元函館の人間で名前が残っているのは蛯子末次郎一人ですが、前島密（郵便の父）、井上勝（日本鉄道の創始者）、吉原重俊（日銀総裁）、今井兼輔（海軍大臣）など、後の日本の発展に尽くした人物を多く輩出します。ある時、斐三郎は本当に実務に詳しいのかという陰口が叩かれます。そこで、斐三郎は、函館の船大工棟梁・続豊治が１８５７年に設計、建造した日本最初の西洋帆船（商船）箱館丸を使って、門下生と共に日本一周の実習航海を二度するなどその実力を見せ付けました。しかし、斐三郎は、１８６４年に自ら設計した五稜郭の完成を見ることなく、江戸の蕃書調所の教授として転出します。諸術調所は、斐三郎のほかに教授役の名前は出てきません。斐三郎はすべての学問を一人で教えていたマルチ学者で、つまり、学長兼教授でした。そのため斐三郎が函館を去ると諸術調所も閉校になってしまいます。

一方、江戸の蕃書調所は、官立の開成学校を経て後の東京帝国大学（現東京大学）となります。諸術調所も斐三郎の後を継ぐ者がいれば、函館に帝国大学ができていたかもしれず、非常に惜しい学校を失ったと思います。また、新島襄も諸術調所へ入学するために函館に来ますが、斐三郎はすでに江戸に帰っていたので二人は行き違いになります。そのため、襄はハリストス正教会のニコライ神父にかくまわれ出国の機会を窺います。もし、諸術調所が続いていたら、襄の渡米も同志社大学もなかったかもしれません。諸術調所があまり知られていないのは、開校からわずか８年で閉校、辺境の蝦夷地にあった等のことだと言われています。しかし、これだけ優秀な人材を輩出した武田斐三郎の業績は消えることはないだろうと思います。

函館の女子教育

明治１５年、元町にプロテスタント系の遺愛女学校（現在の遺愛学院）ができます。これが北海道における外国の学校のスタートです。このとき、明治６年にキリスト教は解禁されましたが、そう簡単に住民の意識は変わりません。遺愛女学校の１期生から３期生までは全員弘前の人で、函館出身の卒業生はいませんでした。その後、明治１９年にカトリック系の聖保禄女学校（現在の白百合学園）が遺愛女学校と隣同士でスタートします。さらにハリストス正教会、聖公会も相次いで女学校を開校しました。このように函館の女子教育はキリスト教系から始まったのです。

西洋洗濯伝習所

その頃の洗濯は灰汁（アク）を石鹸代わりにし、西洋式の石鹸、洗濯板、アイロンも知られていません。洋服も日本に入ってきたばかりで、洗濯方法も分からないという状況でした。函館支庁は、明治１２年に現在の八幡坂の下に「西洋洗濯伝習所」を開校し、そこでイギリス領事ユースデン夫人が小学校の教員を対象に西洋式の洗濯を教えることになりました。しかし、ユースデン夫妻が本国に帰国することになり、１年で伝習所は閉鎖されています。

アイヌ学校（旧土人学校）

イギリス聖公会が元町の教会そばに明治２５年創設、２６年に碧血碑の下に移ります。定員は２０人で生徒は函館だけでなく、十勝、日高方面からも来ました。授業内容は小学校程度で、ほかにローマ字の聖書を教え、生徒１４人が洗礼を受けます。校長のネトルシップ宣教師は、現在の谷地頭温泉前の空き地で函館住民にホツケー、フットボール、野球を教え、また赤い自転車を乗り回し市民にうらやましがれました。

先進的だった函館の教育

最近、東京大学等が海外の大学に合わせて９月入学を実現させようとしていますが、函館の学校では明治２０年に９月入学を行っています。また、現在と同じ４月入学も、全国的に明治３３年に実施される前の明治２７年にすでに行われていました。外国の文化を積極的に受け入れてきた函館では、教育も最新の方式を取り入れていたのです。

写真：旧函館病院跡地の「諸術調所」の案内看板